

大久保愛海「三浦半島の方言意識と風向名について」
（『学習院大学国語国文学会誌』第 60 号、2017 年 3 月）

本論文において誤りがございました。謹んでお詫びの上、以下の通り訂正致します。

（誤）三崎 石綿喜一郎氏

→（正）三崎 石渡喜一郎氏

三浦半島の方言意識と風向名について

大久保 愛海

1. はじめに

神奈川県三浦半島の方言については日野資純（1952）や佐々木英樹（2000）によってその研究の一端として触れられることはあったものの、三浦半島の具体的な方言語形の調査を行ったものは少ない。日野氏や佐々木氏の研究によって三浦半島に特徴的な方言語形の存在が確認されながら、未だ三浦半島地域の方言研究は進んでいない。また、三浦半島の方言に対する意識調査を行った研究も見受けられなかった。そこで今回は三浦半島を構成する横須賀市・三浦市の方言の使用状況及び地域に差がでやすい風向名を調査した。これについて第2章で方言の意識調査を、第3章で風向名の調査について報告する。

2. 三浦半島の方言の現況調査

2.1 調査方法

本稿では、漁港周辺の地域とその他の地域との方言に対する認識や認知度を調査した。漁港周辺の地域の代表として三浦市では松輪を、横須賀市では鴨居を選び、それ以外の地域については三浦市・横須賀市のいずれかであれば条件はつけなかった。また、その地域に対する方言の認識をはかるため、回答者は10年以上横須賀市・三浦市に居住歴のある人に限定した。調査期間は2015年9月から2016年2月まで、回答者は20代から90代までの合計29人である。調査に用いた質問紙は資料1の通りである。なお、質問番号5から8の各語については三浦半島において典型的と思われる語形を選んだ。

2.2 方言の認知度について

まず、自身が方言を使っていると自覚している人はどの程度いるのだろうか。今回の調査では29人を対象としたが、うち16人が方言を使っていると意識していた。では具体的にどのような言葉を方言として意識するのだろうか。回答は以下の通りである。

- 1) 「～だべ」 20歳 男性 秋谷
- 2) 「～だべ・やんべーよ」 79歳 男性 鴨居
- 3) 「～だんべ ～だべ」 64歳 男性 鴨居

資料 1 調査に使用した質問紙

三浦半島の方言に関するアンケート

学習院大学文学部の大久保愛海と申します。現在卒業論文の研究で三浦半島の方言に関する調査を行っています。このアンケートをもとにみなさんが三浦半島の方言についてどのように感じているかを是非調査させていただきたく思います。何卒ご協力お願いいたします。

1. ご自身が方言をつかっていると自覚することがありますか。(はい・いいえ)
2. はいと答えた方にお聞きます。具体的にはどのような言葉が方言にあたると思いますか。
()
3. 三浦半島に方言があると感ずることがありますか。(はい・いいえ)
4. 1ではいと答えた人にお聞きます。それはどのような時・場所で感ずますか。
()
5. 「おっぺす」という言葉を使いますか。例) 使わない (聞いたことはある) / 聞いたこともない
使わない (聞いたことはある / 聞いたこともない)
使う (どのような意味ですか。①ものを押す ②その他の意味 ())
6. 「てっぱつ」という言葉を使いますか。
使わない (聞いたことはある / 聞いたこともない)
使う (どのような意味ですか。①大きい ②その他の意味 ())
7. 「でんぼ」という言葉を使いますか。
使わない (聞いたことはある / 聞いたこともない)
使う (どのような意味ですか。①お尻 ②その他の意味 ())
8. 「うんめろ」または「おんめろ」ということがありますか。
使わない (聞いたことはある / 聞いたこともない)
使う (どのような意味ですか。①たくさん ②その他の意味 ())
9. 三浦半島の方言についてどのような印象をもちますか。例) 使いたくない あらっほい 良い
()
◇差支えない範囲で以下の情報もご記入をお願いします。(統計上の使用に限定いたします。)
性別(女・男) 年齢(満 歳) 職業 ()
居住地域 () 例 横須賀市浦賀 など
※居住歴を教えてください(例、5～15仙台市→18～現在 横浜市)
()
両親の出身地 父 () 母 () 例 山形県鶴岡市
差支えなければ、ご氏名 もしくは イニシャル ()
質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

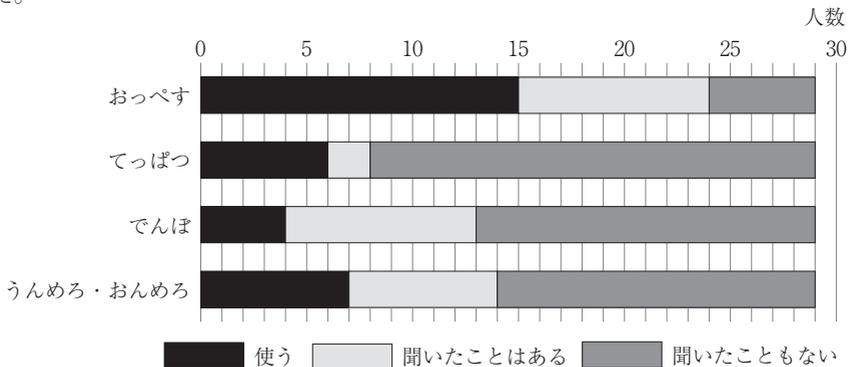
- 4)「だべ じゃん」22歳 男性 逸見
 5)「～じゃん」43歳 女性 横須賀市不詳
 6)「～だべ・～じゃん」28歳 男性 初声

このように語尾の「だべ」「だんべ」「じゃん」を挙げているものが最も多かった。一方他の回答としては以下のものが挙げられた。

- 7)「おらっち おめっち」91歳 女性 鴨居
 8)「たごめる」32歳 女性 鴨居
 9)「とんじゃかない・とっちんぱっこ (ちんぱっこ)・～だべ・ひゃっこい (ひゃい)・うる (捨てる)」21歳 女性 三浦市不詳

1)～6)までのような語尾の変化だけでなく単語の方言語形もあげられた。語尾の変化は三浦半島に限らず神奈川県の方言や若者ことばとして広く認知されている。今回は三浦半島に特徴的な方言について調査したい。そこで7)～9)のように長島文夫(2005.10)等の方言資料にも記載された、古くから三浦半島にある方言語形を認知しているか調査をした。

質問番号4～8の「おっぺす」(ものを押す)「てっぱつ」(大きい)「でんぼ」(お尻)「うんめろ・おんめろ」(たくさん)の各語についての全体の認知度は以下の通りであった。



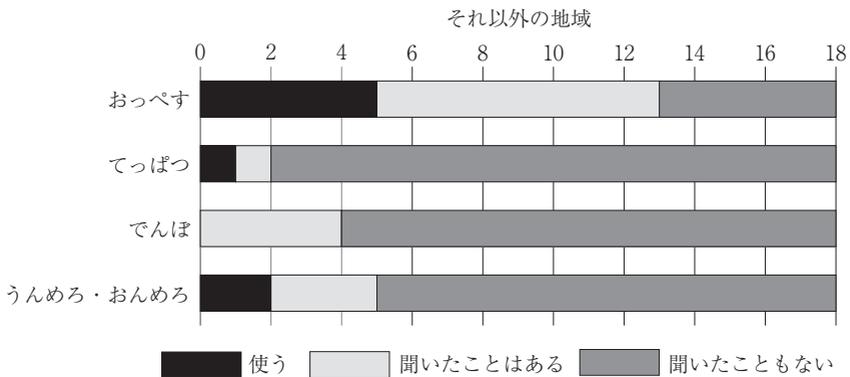
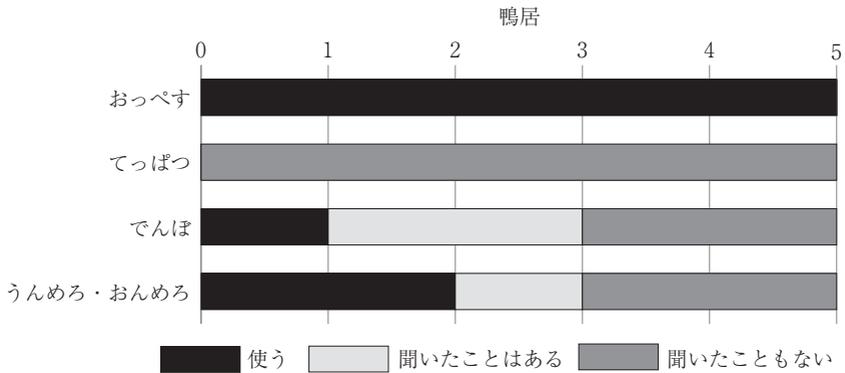
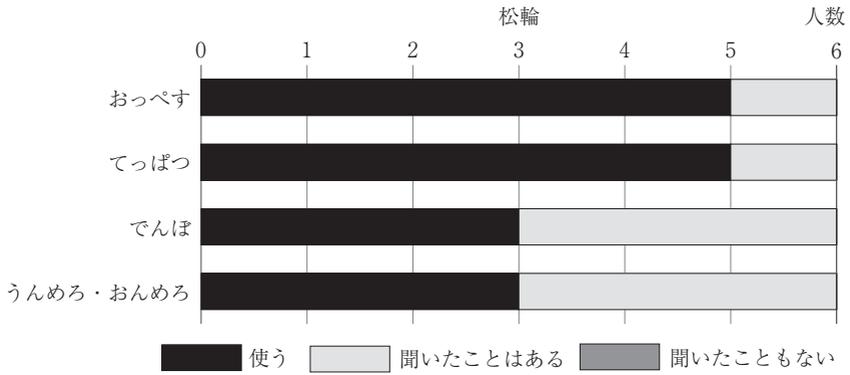
グラフ 1 各語の全体の認知度

最も認知度が高いのは「おっぺす」で29人中24人が認知していた。そのうち実際に使用すると回答したのは15人であった。尚、各語を「使う」と回答した人については全て①の「ものを押す」「大きい」「お尻」「たくさん」の意味で使用していた。逆に最も認知度が低いのは「てっぱつ」で29人中8人が認知していて、そのうち実際に使用すると回答したのは6人だった。「でんぼ」は29人中13人が認知しており、使用すると答えたのは4人、「うんめろ・おんめろ」は29人中14人が認知し、そのうち7人が使用すると回答している。したがって「てっぱつ」は比較的認知されていないものの、他の語は半

(22)

数以上の人が認知しているという結果になった。

では次に、漁港周辺地域代表として松輪・鴨居とその他の地域に分けて考察する。



グラフ 2 各地域での各語の認知度

上のグラフ2の結果をみると漁港周辺とそれ以外の地域には明らかに方言の認知度に差がある。松輪では「おっぺす」は回答者全員が認知しており、使用すると回答した人も6人中5人であった。「てっぱつ」「でんぼ」「うんめろ・おんめろ」の3語も6人中6人全員が認知していた。「てっぱつ」を使用すると答えた人は5人であった。「でんぼ」と「うんめろ・おんめろ」はともに半数の3人でが使用するとの結果がでた。

次に、鴨居では「おっぺす」は5人中5人と松輪と同じく回答者全員が認知・使用していた。しかし「てっぱつ」は5人中5人全員が「聞いたこともない」と回答し、認知度の低さが伺える。「でんぼ」は5人中3人が認知していたが、実際に使用すると回答したのは1人だった。「うんめろ・おんめろ」は5人中3人が認知しおり、うち2人が「使う」と回答した。

最後に松輪・鴨居以外の地域の結果を分析する。「おっぺす」は18人中12人が認知しているが「使う」のは5人とどまった。「てっぱつ」は18人中2人が認知しており、うち1人が使用すると回答した。「でんぼ」は4人が認知しており使用者は0人であった。「うんめろ・おんめろ」については18人中5人が認知していたが、使用者は2人とどまった。

以上から、松輪と鴨居を比較してみると、「おっぺす」は両地域ともに全員が認知している点で共通していた。しかし松輪で回答者全員が「てっぱつ」を認知していたのに対し、鴨居では誰も認知していなかった。また松輪では半数が「でんぼ」を使用すると回答していたのに対して、鴨居では20%程度であった。そして松輪で「うんめろ・おんめろ」を半数が使用すると回答したのに対して、鴨居では40%と同程度の使用率であった。

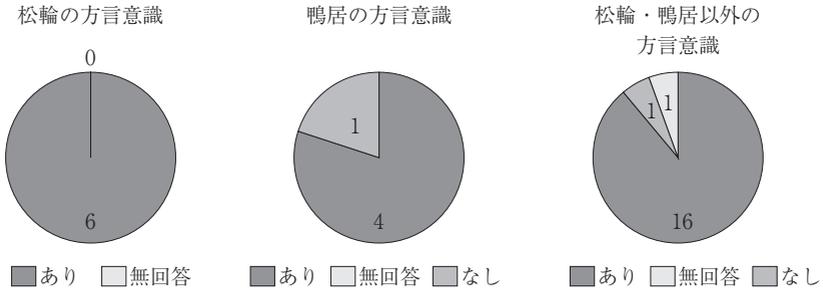
これらの結果から「おっぺす」は比較的どの地域でも認知、使用している人が居るのに対し、「てっぱつ」「でんぼ」「うんめろ・おんめろ」等は松輪と鴨居とそれ以外の地域では認知度に差があることが分かった。これらの結果を踏まえて各グラフを並べてみると、松輪>鴨居>それ以外の地域の順で方言が認知・使用されていることがわかる。これは松輪に比べて鴨居の方がより鉄道路線の駅に近く、交通の便が良い事等が原因として考えられる。バス便も少なく、松輪の方がより人が行き来しづらい。よって方言も鴨居に比べ、より定着しているのだろう。

では次にこの結果と質問番号3「三浦半島に方言があると感じるがありますか。」に対する回答を比較したいと思う。

グラフ3を比べると、松輪では回答者全員が三浦半島に方言があると意識している。鴨居では5人中4人が方言があると感じている。それ以外の地域でも18人中16人と90%程度意識していた。

しかし、鴨居と松輪・鴨居以外の方言意識の割合に差がないにも関わらず「おっぺす」「てっぱつ」「でんぼ」「うんめろ・おんめろ」の認知率に差が見られるのはなぜか。

(24)



グラフ 3 方言意識の有無

前述の内容を踏まえると松輪・鴨居以外の地域在住の人は三浦半島の方言を語尾の変化だと思っている可能性がある。前述の回答にもそれが表れている。

- 1) 「～だべ」 20歳 男性 秋谷
- 4) 「だべ じゃん」 22歳 男性 逸見
- 5) 「～じゃん」 43歳 女性 横須賀市不詳
- 6) 「～だべ・～じゃん」 28歳 男性 初声

4) の男性は「おっぺす」以下4項目全てで「聞いたこともない」と回答していた。また、6) の回答をした男性は「おっぺす」こそ「聞いたことはある」と回答しているが、「てっぱつ」「でんぼ」「うんめろ・おんめろ」については「聞いたこともない」と回答している。このように三浦半島に方言があると認識していても、それが必ずしも鴨居や松輪で話されているような方言とは一致しないことを指摘しておきたい。

2.3 方言を感じる場所について

三浦半島の方言を感じるのはどういった時なのか、質問番号4「1ではいと答えた人にお聞きします。それはどのような時・場所で感じますか。」に対する回答を見ていきたい。

回答の中で最も多かったのは三崎周辺の地域に行った時、その地域で話をする時、であった。具体的には以下の回答がある。

- 10) 「三崎方面・三崎東岡より南の方」 27歳 男性 三浦市不詳
- 11) 「松輪・三崎」 37歳 女性 南下浦町
- 12) 「三崎に行ったとき」 43歳 女性 横須賀市不詳
- 13) 「長井や三崎に行ったとき」 64歳 男性 鴨居
- 14) 「地元の人と話すとき 土地の人間同士で話すとき」 77歳 男性 松輪
- 15) 「仕事・日常・ふとしたとき」 32歳 女性 鴨居
- 16) 「土地の人と話したりするとき」 72歳 男性 松輪

10)～13)のように松輪や三崎等に方言があると認識している意見があった。また、14)～16)のように松輪・鴨居の人達は、地元の間人同士で話をする時に方言を使うと認識していた。三浦半島の方言は主に三崎や松輪等漁港を中心として話されていることは自他ともに認めているようである。三崎や松輪以外では先程の例も含め13)や17)のように鴨居に住んでいて方言を話すことがあっても、三崎・長井・佐島・芦名といった地域の方がより方言が残っていると感じる人もいた。

13)「長井や三崎に行ったとき」64歳 男性 鴨居

17)「佐島や芦名」79歳 男性 鴨居

また、地域に関わらず以下のように回答していた。

18)「漁師・農家の人と話してる時」21歳 女性 三浦市不詳

19)「漁業者が他の人に投げる言葉を聞いたりしたとき」64歳 男性 松輪

20)「海の近く 漁師さんの会話」57歳 女性 浦賀

21)「農家・漁師の多い地区で特に年配の方の会話で。」45歳 男性

22)「祖母と話した時」20歳 男性 秋谷

23)「親類と会った時」60歳 男性 浦賀

24)「祖母と父が日常的に方言で話すので、うつってしまうことがある。」31歳 男性 南下浦

18)～21)では漁師・農家の多い地域、あるいは22)～24)のように年配者との会話で感じるようだ。

具体的に名前が挙がった地域としては三崎・松輪・長井・佐島・芦名等やはり漁港の周辺地域、特定の地域でなかったとしても漁師・農家の人、或いは年配者の使う言葉の中に方言があると認識されていることが分かった。漁港を中心とした地域で方言が残りのやすいのは、漁業関係者がその土地から離れずに暮らし続けていることが要因として考えられる。

2.4 漁港周辺における方言に対する印象

三浦半島に住む人は漁港周辺の方言にどのような印象を持っているのだろうか。注目すべきは同じ地域に住む人でも年代によって方言に対する認識が大きく異なることである。質問番号9「三浦半島の方言についてどのような印象をもちますか。」に対して以下のような回答が得られた。

25)「特に何も感じない」77歳 男性 鴨居

26)「特にない」81歳 男性 松輪

27)「聞きなれば違和感はない、あらっばくもない」77歳 男性 松輪

しかし、一方で50代・60代の回答は以下の通りであった。

28)「荒っばい」50歳 男性 松輪

(26)

29) 「一般の人にはつかわないようにする」64歳 男性 鴨居

28) と29) の回答を見ると、三浦半島の方言に対してネガティブな印象を持っていることがわかる。また、質問番号4「1ではいと答えた人にお聞きします。それはどのような時・場所で感じますか。」の回答には、方言を話していると自覚する場として以下を挙げている。

30) 「地元の人と話しているとき」77歳 男性 松輪

31) 「みんなが話している時」81歳 男性 松輪

しかし、50代・60代の回答者は以下のように答えていた。

32) 「他の所に行った時」60歳 男性 松輪

32) 「横須賀の人に方言を使って怒られた時」50歳 男性 松輪

33) 「(方言で話していて) 釣りの客に船頭が怒っていると言われた時」64歳 男性

このことから、自身の使う方言に対してマイナスのイメージを抱いている原因はあくまでも他の地域の人からの評価によるのだと分かる。現在の50代60代の人達は戦後高度経済成長期を迎えたタイミングで働きはじめた。サラリーマンが増えた時代でもある。実際回答者のうち二人は横浜・東京にサラリーマンとして働いた経験があった。就職し地元を離れたとき、別の地域では自身の言葉がネガティブなものとして捉えられるのだと痛感するのだろう。そのため松輪では60代前後を境に、自分からは方言を話さなくなると考えられる。

その一方で方言に対してポジティブな印象を抱いているという回答も僅かながらあった。

34) 「あたたかい かわいらしい」57歳 女性 浦賀

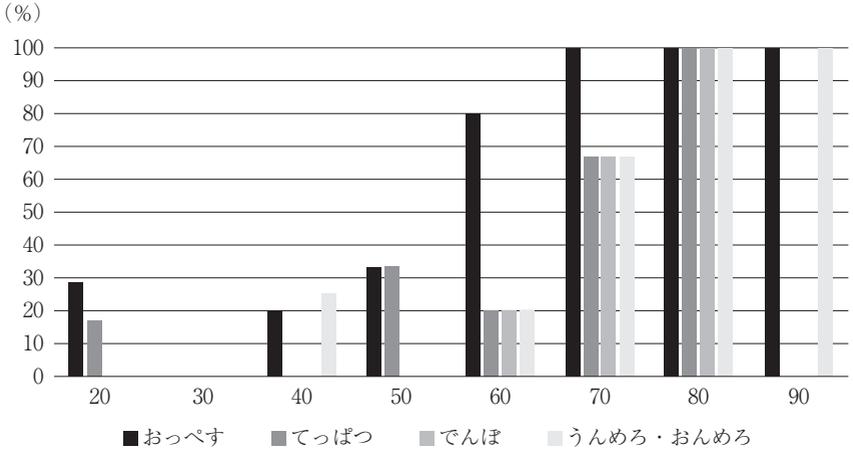
35) 「[都会の方には「ケンカしてるの?」と聞かれた事もあるので荒いのですが、地元民同士で大事にしていけたらと思います。】45歳 男性 初声

34) の回答者は東京都出身で30歳まで東京に住んでいた。東京都出身の人の目線から見ると三浦半島の方言には「あたたかい」「かわいらしい」といった感覚があるのかもしれない。

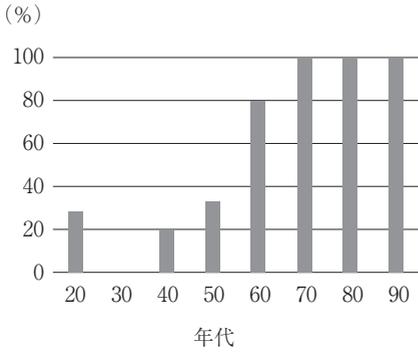
以上方言に対する印象についてまとめると、他の地域の人からネガティブな指摘を受けた世代の人たちは方言を使いたくないとの印象を持ちがちである。それに対して、70代より上の世代の人達には「荒っぽい」と意識されることもなく、日常に使用する言葉として定着しているのである。ただし、必ずしもネガティブな印象だけを持っているわけではなく、ポジティブな意見もあった。

2.5 世代による方言認識の差について

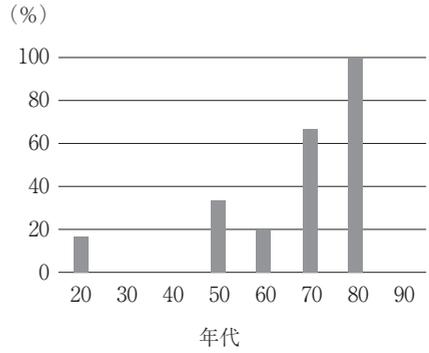
次に世代ごとの方言認識について考察していきたいと思う。



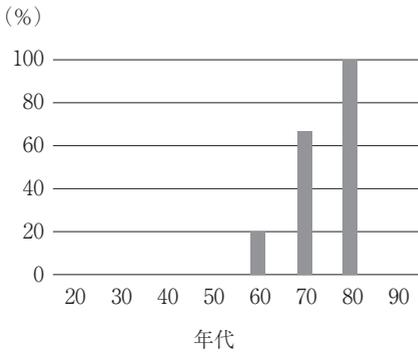
おっぺす



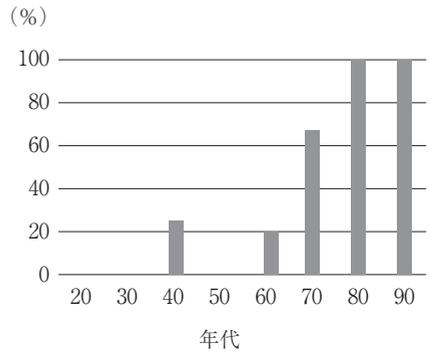
てっばつ



でんぼ



うんめろ・おんめろ



グラフ 4 世代別の方言使用の割合

(28)

表 1 世代別の回答人数

年代	20	30	40	50	60	70	80	90	合計
人数	7	4	5	3	5	3	1	1	29

先に示したグラフ 4 は世代別に各語の使用割合を表したものである。また表 1 は回答者の年代別人数を表している。

前節で言及したように「おっぺす」については20代でも使用がみられる。しかし、70・80・90代になるとその使用率は100%になる。「てっぱつ」については20代に使用が認められるが、50代以降の年代の使用率と比較するとやはり差があり、年代が上がるにつれて使用率は上がるのである。「でんほ」については20～50代では「使う」と回答した人はおらず、60～80代の使用のみであった。「うんめろ・おんめろ」については20代・30代では使用されず、40代と60代で20%程度、70代では60%を超え、80・90代では100%の使用率となった。

以上の結果を踏まえると各語によって使用率に差はあるものの、全体的には70代以上になると方言を使用する傾向があると分かった。三浦半島においても、方言はやはり若者世代には使用されにくく、年配者に使用されやすいのである。

2.6 性別による方言認識の差について

次に、方言の使用や方言に対する印象について性別による差を考察したい。回答者29人の性別による内訳は男性17人、女性12人である。

表 2 男女別方言使用者数の割合

方言の使用者数	性別に対する割合 (%)
男	12 / 17人中 70.6
女	4 / 12人中 33.3
合計	16 / 29人中

※小数点二位以下四捨五入

上の表 2 は質問番号 1 「ご自身が方言をつかっていると自覚することがありますか。」に対して「はい」と回答した人の男女別の人数と、性別ごとの回答者に対する「はい」と回答した人の割合である。方言使用を自覚している男性は12人、女性は4人だった。男性回答者は17人で、そのうち12人が方言を使っている自覚があった。つまり男性回答者のうち70%は方言を使用している自覚がある。また女性回答者12人のうち方言を話すとして自覚している人数は4人で、女性回答者全体のおよそ33%にとどまった。女性の方が方言の使用を控える傾向にあると言える。実際に三浦半島方言に対する印象も以下の回答が寄せられた。

37)「汚い印象があるので、使うことはないと思います」41歳 女性 東浦賀

38)「あんまり使いたくないです」43歳 女性 横須賀市未詳
また方言の使用を自覚すると回答した女性の中にも下記の回答があった。

39)「あらっばい 人前でつかいたくない」91歳 女性 鴨居

漁港周辺に住んでいながら、しかも、より方言を使用しがちな世代にも関わらず使用を控えたいという回答があった。

男性に比べ、女性の方がより方言の使用を控える傾向があると分かる。前章の臨地調査においても、「子供のころは自分のことを「おら」と言うこともあったが大人になるにつれて女性らしく振舞うようになり、使用を控えるようになった」という話も聞かれた。「荒っばい」という印象をもたれがちな方言を使うのは女性にとっては控えたいと思うことなのだろう。

3. 風向名の調査

3.1 調査方法

三浦半島の各地域の方言差異を見る例として、風向名調査を行った。特に方言が根強く残る漁師町・漁港周辺地域を臨地調査の対象とした。具体的には横須賀市鴨居・長井・佐島。三浦市三崎・松輪の5箇所である。被調査者は以下の通りである。

○佐島	三橋学氏	40歳	男性	
○長井	M氏	84歳	男性	
	S氏	83歳	女性	
○松輪	H氏	81歳	男性	
	A氏	56歳	男性	
○三崎	石綿喜一郎氏	79歳	男性	
○鴨居	小川純治氏	81歳	男性	※承諾を得られた方のみ氏名を掲載した

これらに原田満彦（1973.11）原田満彦（1974.3）明石明（1978.9）に記録されていた三浦市の間口・上宮田・金田・小網代を加えた計9箇所の風向名から考察する。今回の調査結果には対面での回答だけではなく電話による回答も含まれる。調査は2015年8月から2016年2月までに行った。

3.2 調査結果

以下の表3は調査結果をまとめたものである。*のある地名は先行研究の調査結果からの引用である。斜線部分は特にその方角を指す言い方がなかったことを表している。なお、間口・上宮田・金田・小網代の4地域のカ（ガ）表記については先行研究の本文



図1 三浦半島概形地図〈<http://www.asahi-net.or.jp/~xn4k-ktb/sozai/tizu/index.html>〉(2016年3月29日参照)

〈参考図〉 引用：Googleマップ〈<https://www.google.co.jp/maps>〉

で鼻濁音として記録されていたため論文中で「サカ」と記載されていたところを実際の発音により近いものとして表中には「サカ(ガ)」のように表記している。長井の被調査者M氏とS氏は同じ場で聞き取りをしたため、表の調査結果は区別していない。松輪のH氏とA氏についてはH氏の回答をi)、A氏の回答をii)として表記している。

まず回答が得られた地域に共通しているのが北風を「ナレエ」「ナレ」「ナレー」と呼ぶことである。これは「ナライ」を縮めて呼ぶ言葉だろう。「ナライ」は『日本国語大辞典』（第二版）によると「冬に山並みに沿って吹く強い風。その地方により風向が異なる。ならいかぜ。ならいのかぜ。ならいこち。ならえ。《季・冬》」とあり、三浦半島に限らず各地域で使用が報告されている語である。同辞典の方言の項目には以下のように記載があった。

- (1) 北風。上総†068伊豆八丈島†076千葉県南部001054東京都伊豆諸島32633343
神奈川県藤沢市319中郡320静岡県榛原郡059三重県志摩郡585大分県大分市・
大分郡941◇ならやあ千葉県安房郡302
- (2) 雨を伴った北風。三重県志摩郡585◇ならいちけ〔一時化〕神奈川県葉山059

表3 三浦半島の八方角の風向名（大久保愛海の2016年調査と先行研究との総合）

	鴨居	*上宮田	*金田	*間口	松輪	三崎	*小網代	長井	佐島
北	ナレエ	ナライ ナレー	ナレー ナレーノカゼ ナライノカゼ	ナライ アメナレー	i) ナレ エ ii) ナレ ii) ナレ ツケ ii) ナラ イノカゼ	ナレエ ナレー ナラ イ (女性)	ナライ ナレー	ナレエ ナレノツカ サ ナライ シュウエテ (冬の風)	ツカセ ナレ ナレノツカ サ(強い北 風) オオナレ
北東	ナレエ シモウサ ナライ	ヒカ(ガ)シ モノ イナサ	イナサ	シモサ	/	/	ヒカ(ガ) シナレー	イナサ	ツカセ ナレ ナレノツカ サ
東	コチ	ヒカ(ガ)シ モノ イナサ	ヒカ(ガ)シ モノ ヒカ(ガ)シ モン	イナサ(台 風のことシ ケカゼ・ア ラン)	i) コチ ii) イナ サ	ヒガシモ ン シガシモ ン	コチ コチカゼ シカ(ガ) シモン シカ(ガ) シ	イナサ ヒガシ ヒガシモン	コチ ヒガシモン
南東	イナサ	ヒカ(ガ)シ モノ イナサ	イナサ サンカジ	イナサミナ ミ	i) イナ サ	イナサ	イナサ	/	カゼ ミナミ
南	ミナミ	ミナミ	ミナミノカゼ	ミナミ	i) シタ カゼ	/	ミナミカ ゼ	ミナミノカ ゼ	カゼ ミナミ
南西	ナンセー	ナンセーノカ ゼ ダシノカゼ タイコミナミ (強く長い期 間にわたって ふく)	/	ナンセーノ カゼ	/	/	ニシミナ ミ ニシナレ ー	ナンセーノ カゼ	カゼ ミナミ
西	ニシノカ ゼ	ニシモン ダシノカゼ ニシオロシ (富士山の方 から来る風)	ニシノカゼ ニシモン ニシ	ニシカゼ	ii) サガ ii) ニシ モン ii) ニシ モノ	/	ニシノカ ゼ	ニシノカゼ ニシカゼ ニシモン ニシモノ ニシ サガ サガッポ	ニシモン ニシノカゼ
北西	ダキカゼ	サカ(ガ)ナ ライ ベットー ダシノカゼ	サカ(ガ) サカ(ガ)ノ カゼ サカ(ガ)ナ レ サカ(ガ)ッ ポ	サカ(ガ)	ii) サガ ナレ ii) サガ ii) サガ ッポ	サンカジ サガ(富 士山から くる冬の 風)	サカ(ガ) ベットー (台風の時 期)	/	ニシナレ サガッポ オオナレ ツカセ

※斜線部分はその方角を指す言い方が今回は見られなかった事を表す。間口・上宮田・金田・小網代の4地域のカ(ガ)表記については先行研究本文で鼻濁音として記録されていたため実際の発音により近いものとして表中には「サカ(ガ)」のように表記している。大久保の調査で長井の被調査者M氏とS氏は同じ場で聞き取りをしたため、表の調査結果では区別していない。松輪のH氏とA氏はH氏の回答をi)、A氏の回答をii)として表記している。

- (3) 東北風。伊豆八丈島†077千葉県054062284東京都利島323三宅島・御蔵島333静岡県520521愛知県愛知郡563知多郡569三重県志摩郡585度会郡586
- (4) 東風。東京都江戸川区054静岡県538540543愛知県知多郡570
- (5) 雨混じりの強い東風。◇ならいじけ静岡県田方郡521
- (6) 東南風。東国†035静岡県富士郡062
- (7) 東南の方角。東京都江戸川区308
- (8) 西南風。江戸†025岩手県上閉伊郡097
- (9) 西北風。岩手県気仙郡101宮城県亘理郡054茨城県062189193埼玉県北足立郡062千葉県261海上郡268印旛郡274三重県志摩郡585
- (10) 北西の方角。千葉県印旛郡040
- (11) 山の陰。岩手県気仙郡100

今回の調査で最も多かったのは(1)の北風の意だったが、報告されている地域は千葉・東京・神奈川・静岡・愛知・三重・大分と太平洋に面した海側の地域が多い。三浦半島でも太平洋側の地域に共通した言い方が残っていることが確認された。「ナライ」については同じ三浦半島内でも各地域によって多少言い方が異なる「ナレ」「ナレー」などである。また風の勢力の強いものであれば「オオナレ」「ナレノツカサ」と呼ぶ。「シモウサナライ」や「アメナレー」など、基本の北風の意を指す「ナライ」から派生しているものも多くある。

次に7つの地域で共通する南東の風「イナサ」について見ていく。これも『日本国語大辞典』（第二版）には「東南の方角から吹く風。特に台風がもたらす強風をさしている。《季・夏》」と記載があり、方言での使用地域は以下の通りである。

- (1) 東南の風。上総†068江戸†020東海†035尾張†099青森県南部084岩手県062097101宮城県亘理郡054茨城県水戸市062千葉県021062261東京都江戸川区308大島326利島（恐ろしい風）331三宅島333八丈島334神奈川県001319321静岡県054059520愛知県571知多郡569三重県054586588大阪府泉南郡844兵庫県淡路島671和歌山県690山口県大島801熊本郡844徳島県板野郡844香川県827伊吹島829小豆郡844愛媛県西部844高知県幡多郡864◇いなさの東京都大島326◇いなさまぜ和歌山県南部690
- (2) 南風。伊豆八丈島†077福島県会津・浜通155茨城県稲敷郡193静岡市054愛知県碧海郡564高知県幡多郡844
- (3) 東南東の風。千葉県054
- (4) 東風。茨城県100千葉県山武郡270静岡県庵原郡844和歌山県（強風）695◇いなせ千葉県印旛郡054
- (5) 東北の風。神奈川県三浦郡054三重県南牟婁郡603兵庫県赤穂郡660徳島県阿波郡・板野郡（強風）811高知県安芸郡844

(6) 西北の風。千葉県東葛飾郡276

四国から東海、東北までの広い地域で使用されている。しかし、上宮田・長井・間口・佐島では東の風を「イナサ」と呼んでおり、(4)に注目すると、さらに狭い地域での使用に限られている。さらに上宮田・金田では北東の風についても「イナサ」と呼ぶが、これは(5)に記載がある。これによると三重県・兵庫県・徳島県・高知県での使用の他に神奈川県三浦郡でしか使用が報告されていない。ここから関西方言との関係を見出すことができるのである。

では次に遠隔地方と飛び地的に共通する一部の語について考察したい。間口では東の風を「アラシ」と呼ぶが、『日本国語大辞典』(第二版)に以下のようにあった。

(16) 東風。兵庫県赤穂郡660和歌山県(朝吹くもの)690山口県大津郡844《あらせ》新潟県岩船郡(夏の夜吹くもの)362

(17) 東南東の風。山口県大津郡844

(18) 南東の風。島根県瀬摩郡844◇あらせ徳島県811香川県(漁民語)827仲多度郡(朝晩一時だけ吹くもの)829

また『日本方言大辞典』には「⑩東風。兵庫県赤穂郡660 和歌山県(朝吹くもの)362」と記載があった。東風の意味で使用されるのは兵庫県・和歌山県をはじめとして九州など西日本の地域が挙げられている。両辞典ともに神奈川県での使用は報告されていないが、今回の調査で「イナサ」も西日本の地域と共通していたことを踏まえると、改めて西日本地域との関連性が指摘できる。

次に4つの地域に共通している北西の風「サガ」「サガッポ」について見ていく。『日本国語大辞典』(第二版)には千葉県・東京都・神奈川県・静岡県で使用されているとの記載があった。この語は三浦半島に特徴的というよりは関東地方に典型的な言い方であるようだ。

その他の風向名の特徴としては風向に「～モン」をつけることで風の名前とすることがあげられる。『日本国語大辞典』(第二版)『日本方言大辞典』の両辞典にもこのような風向名の表しかたの記載はなかったが、上宮田・金田・三崎・小網代・佐島では「ヒガシモン」や「ニシモン」といった表現がみられた。しかし、どの方角にもこのような表現が使用できるわけではなく、三崎では「ヒガシモン」または「シガシモン」とは言っても「ニシモン」とは言えないそうである。上宮田・金田・佐島では「ニシモン」という言い方もされているため、同じ「～モン」のつけ方でも違いがあるということが分かった。

さらに1地域のみにもみられる表現もいくつかあった。「ダシノカゼ」は上宮田で南西の風を指す語である。『日本方言大辞典』によると「⑧南西風。《だしのかぜ》富山県高岡市 島根県瀬摩郡・八束郡」とあり、富山県・島根県といった日本海側で記録されている語であることがわかる。前述の他の語は太平洋側の地域と共通したものが多かった

が、このような語も存在している。

また松輪では南の風を「シタカゼ」と呼んでいることがあげられる。『日本国語大辞典』（第二版）によると方言の項目に「南西風。神奈川県三浦郡」とあり、神奈川県三浦郡の使用のみ報告されている。松輪の漁師の方に語源を聞いたところ、地図上で南が下になるから「シタカゼ」と呼ぶとの話があった。語源がそれだけであれば全国的に呼ばれていてもおかしくないが『日本方言大辞典』にも神奈川県三浦郡のみの報告にとどまっていた。さらに、佐島では南の風を「カゼ」という。『日本国語大辞典』（第二版）には方言の項目に以下の記載があった。

- (1) 北風。滋賀県伊香郡・沖ノ島607
- (2) 暴風。◇かじ沖縄県石垣島・新城島996◇はじ沖縄県黒島996
- (3) 夜間などに人に災いする魔風。長崎県対馬（死霊の風）913熊本県玉名郡058
鹿児島県肝属郡970
- (4) 憑物（つきもの）。長崎県五島「かぜを負った（憑かれた）」054
- (5) 中風。熊本県919玉名郡「かぜに当る（中風になる）」058
- (6) めんこ遊びの一種。群馬県勢多郡236

北風・暴風などの意味での報告はあったものの南風での使用は報告されておらず、『日本方言大辞典』でも同様であった。佐島の漁師の方によると南の風は沖から岸に向かって吹く。すると漁にならないため、「明日はカゼだから漁ができない」とわかりやすく表現しているのだそうだ。

『日本国語大辞典』（第二版）『日本方言大辞典』の両辞典に記載のない語もあった。鴨居で北西の風を指す「ダキカゼ」という語がそれにあたる。このように、まだ使用の報告されていない語も三浦半島の風向名の中には見ることができた。

最後に、長井で呼ばれている「シュウテ」という呼び方についてであるが、この語は『日本国語大辞典』（第二版）『日本方言大辞典』両辞典に記載があった。『日本方言大辞典』には以下のように記載があった。

- (1) 暴風雨の前兆。千葉県夷隅郡039君津郡040
- (2) 曇天。千葉県上総001《しうてっぴより [一日和]》千葉県夷隅郡（冬季の曇天）
- (3) 晴天から急に温度が下がり、あられが降るような天気。《しおて》神奈川県藤沢市319
- (4) あられ。《しおて》神奈川県中郡320
- (5) みぞれ。《しゅーて》神奈川県三浦郡054
- (6) 雪空。《しゅーてんぼー》神奈川県三浦郡054
- (7) 正月ごろに降る雹（ひょう）の小さいもの。《しおて》神奈川県三浦郡059
- (8) 二月ごろに吹く疾風。《しおて》静岡県田方郡521

今回聞き取り調査をした時には特にみぞれが混ざったような風のことを指すとのことだった。よって(5)の意があてはまるだろう。これは三浦郡でのみ使用が確認されている語であった。「あられ・みぞれ・ひょう・雪」交りの風であるという(3)(4)(5)(6)(7)は全て、三浦群か神奈川県内である点も興味深い。また同じ語を使用する地域も関東全域というわけではなく、千葉県・神奈川県・静岡県と限定的であったため、これらの地域に特徴的な語といえるのではないだろうか。

各地域ごとに様々な風向名があるが、それぞれの語を調べていくと三浦半島の方言の伝播の歴史を垣間見ることができた。調査をする中で「イナサ」や「アラシ」のように西日本との関係を指摘できるものがあった。これは「紀伊、伊勢、志摩の漁民は早くから海路より半島を訪れて水産業の発展を促し、幕末にはペリーが来航して開港を迫り文化の発展の基を開いた。」(高木俊雄(1988))の記述にもあるように文化的背景も大きく影響していると思われる。また、これまで三浦半島での使用が指摘されていなかった語形もあった。今回の調査によって新たに使用されている方言が指摘できたことは意義があったであろう。

4. まとめ

今回の研究では、質問票による方言の意識調査及び様々な風向名の調査を行った。質問票の調査結果から三浦半島の方言は70代以上に使用されやすく、男性の方がより使用する傾向にあることが分かった。また、方言に対して特に60代以下の世代はネガティブな印象をもっていることも判明した。しかし、まだ地元根付きながら生活をしている漁師などの人々の中に方言が受け継がれていることもわかった。そして風向名の調査では三浦半島の方言の中には三重県や和歌山県など近畿地方の方言が飛び地的に存在することもわかった。そして三浦半島にのみ使用が報告される語形もあった。今回の調査によって、『日本国語大辞典』『日本方言大辞典』のような辞典に記載されていない神奈川県三浦半島の方言語形がまだ残されていることが明らかになった。

他にも三浦半島には多くの方言語形が残されている。今後さらなる三浦半島の方言研究・調査を行う必要があることを指摘しておきたい。

参考文献

- 大菊昭治『三崎方言集浜言葉』(出版年不明)
 佐々木英樹(2000)「東京湾岸言語地図(横浜市・三浦半島)[1982・83・85]」駒沢女子短期大学『研究紀要』33号、pp. 79-98.
 高木俊雄(1988)『三浦半島の地誌』東隆社
 太刀川総司郎(1949.5)『三浦耳袋』三浦風俗研究会
 長島文夫(2005.10)『三浦海岸シリーズ(Ⅲ)郷土の記録』(私家版)

(36)

中村雅志 (2012.11) 「漁師町の言葉に対するイメージと実態——漁師の言葉は本当に荒いのか——」『地域言語』20号、pp. 65-88. 地域言語研究会

原田満彦 (1974.3) 「三浦半島問口の潮と風」生活語研究所内生活語研究会『フィールドの歩み——生活語研究の記録——』第5号、pp. 25-30.

原田満彦 (1973.11) 「三浦半島小網代の潮と風」生活語研究所内生活語研究会『フィールドの歩み——生活語研究の記録——』第5号、pp. 31-40.

日野資純 (1952) 「相模方言の素描 (その方言区画)」『国語学』第9輯、pp. 48-59.

日野資純 (1984) 「10神奈川県の方言」『講座方言学5——関東地方の方言——』国書刊行会

著者不明 『浦賀町郷土誌』横須賀郷土資料復刻刊行会

謝辞

(おおくほ あいみ、横須賀市立坂本中学校教諭)

本稿の執筆には多くの方言話者の方々や三浦半島地域の方々のご協力を頂いた。また、本稿を編む過程でご助言・ご指摘くださった方々にもお力をお借りした。多くの時間を割き、協力して下さった方々に改めて感謝申し上げたい。そして、調査や分析において様々な点から問題点を指摘しご指導下さった安部清哉先生にも心から御礼申し上げます。なお、本稿は学習院大学文学部日本語日本文学科に提出した『三浦半島の方言研究——漁師言葉を中心に——』（指導：安部清哉教授）で取り上げた内容の一部に更に聞き取り調査を追加してまとめたものである。